

幕府オランダ留学生：職方・大野弥三郎

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

31

(号 / Number)

3・4

(開始ページ / Start Page)

37

(終了ページ / End Page)

65

(発行年 / Year)

1985-03-15

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00006806>

幕府オランダ留学生

——職方・大野弥三郎

宮 永 孝

日本を發つときは「和蘭行御軍艦方」と呼ばれ、オランダ到着後は *Japansche Detachment in Nederlanden* (在蘭日本派遣隊) と称した、徳川幕府が派遣した海軍留学生十五名の一団には、諸技術研修のうえから六名の職方じやくほうが加えられていた。

筆者は、先に教養部『紀要』(社会科学編・第四七号)に「幕府オランダ留学生——職方について」と題して小論を発表したが、職方のひとり——時計・精密機器技師——大野弥三郎については、じゅうぶんに論じ尽くせなかった。しかし、今回は、その後入手したオランダ側の新史料や日本側のそれをも参酌できたので、これまでの空白部分を多少ともうめることができた。

大野弥三郎は諱いみなを規周のりちかといったが、いっしよにオランダに留学した仲間からは、

——時計師、時計師。

と呼ばれていた。

渡蘭前の大野の履歴についてはこれまでよくわからなかったが、弥三郎の曾孫・直道氏(箕面市在住・歯科医)が



大野弥三郎の肖像
(オランダ到着後、ライデンで撮ったもの)

作成した比較的詳細な家系図（ペン書）によって知ることができる。

大野弥三郎（規周）は文政三年（一八二〇）一月二十八日、江戸神田松ヶ枝町に生まれた。大野家は代々、幕府暦局御用の御時計師であった。弥三郎の祖父・大野弥五郎規貞や父・大野弥三郎規行は、すぐれた時計師であると同時に測量器械師であった。伊能忠敬が日本全国を測量し、日本地図を作っ

た話は有名だが、その測量機械の製作者こそ大野弥五郎規貞と弥三郎規行の父子であった。

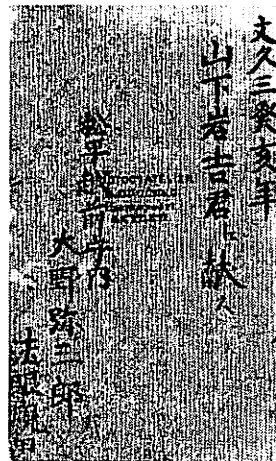
規周は、幼名を直次郎とも弥三郎ともいったようである。弘化二年（一八四五）、弥三郎二十九歳のときに父・規行が亡くなり、これを機に家督を継ぎ、名を規周に改めた。安政二年（一八五五）、松平越前守慶永は幕府に請うて規周を招聘し、江戸本所中之郷の下屋敷に住ませ、機械製造とゲーベル銃の製作に当らせた。元一橋大学教授・山口隆二氏によれば、越前藩の明道館の創立は安政二年のことであり、同校では製械、開物、測量なども教授したから、このことと規周の招聘は何か関係があるものと考えられるという。⁽¹⁾

安政四年（一八五七）、弥三郎はアメリカより渡来した電信機を御浜御殿（のちの浜離宮）において組立て、上覧に供し、通信を試みた。

文久二年（一八六二）、幕府は海軍留学生をオランダに派遣することになったが、規周の技量は幕府からも高い評価を得ていたから、留学生の一員に加えられた。

弥三郎がオランダ留学生の候補となった経緯については、留学生の団長・内田恒次郎の手記（「阿蘭陀行御用留之^{★らんた}内書抜^②」）にくわしい。

文久二年六月十一日付の大野弥三郎に関する内田の「書抜」は次のようになっている。



大野の写真の裏にみえる
直筆の署名
(三崎ユキ氏提供)

阿蘭陀国江蒸気軍艦御詔製造中被差遣候測量器職方之儀ニ付申上
候書付

井上信濃守
木村棋津守

書面之者江御賄被下候外為御手当一日永四百三拾八文ツ、被下候
旨被仰渡、奉承知候

松平越前守抱 測量器師

大野弥三郎

今般阿蘭陀国政府江蒸気御船御詔製造中諸術為研究御軍艦組其外被差遣、時計師等も可被差遣旨被仰渡候ニ付、職業并身元人物等相応之者人撰仕候処、右弥三郎儀は職業も宜是迄海軍所并天方御用をも相勤候者ニ而測量器等一手ニ而仕立、細密之細工等別而巧者ニ仕、手堅人物ニも有之候間、彼国江差遣候積越前守家来申談候処、差支無之趣ニ付、今般一同被差遣候様仕度、御手当筋之儀取調候処、越前守抱とは乍申、元々測量器職人之儀ニ付、此度被差遣候大工鍛冶職同様之御手当ニ而可然哉ニ候得とも、越前守方ニ而は徒之者次席をも申付候趣同人家来申立候ニ付、可相成は外職方とは品能御手当被下置様仕度、服部帰一江相談仕

幕府オランダ留学生

此段奉願候、尤彼国差渡等差向居候ニ付、即今御下知被成下候、此段申上候、以上
戌六月

覚

書面之者^五御賄被下候外、為御手当一日永四百三拾八文宛被下候事

文面には、弥三郎は一日に四百三十八文の日当を与えられる旨の申し渡しを受けた、とある。幕府は、オランダに蒸気軍艦を注文したが、それが建造される間、海軍諸術を修めさせるために御軍艦組（士分）と職方らを派遣することになったこと。時計師（和時計製作者）も職方の一員として派遣することになり、技量や人物の点から、弥三郎が候補者となったこと。かれはこれまで海軍操練所や天文方の御用をつとめ、測量器械などの製作に携った経験を有しており、人物識見ともすぐれているので松平家に請い、オランダに遣わすことになった、とある。

渡蘭時の弥三郎は越前大野藩お抱えの有能な時計師であったのである。が、オランダ行の人選に入ったには別な理由があった。

かねて幕府海軍内では、

——航海用のクロノメーター（経度測定用の時計）が日本でもできねばならぬ。

といった意見が強かった。

留學生派遣の話が出たとき、他の測量機械類の製造をもいっしょに研修させようということになり、大野に白羽の矢が立ったのである。

弥三郎は、オランダ語の素養はなかったが、バタビアからオランダまでの航海中に勉強し、さらに渡蘭後もオランダ人について学んだので、簡単な日常会話には不自由しないまでになった。滞蘭中は、主としてライデンの時計工場⁽³⁾とアムステルダム^{ヤハン}の精密機械師のもとで研修に励んだのであるが、

——日本にもこんな腕のよい時計職人がいるのか！
と、オランダ人は驚嘆したらしい。⁽⁴⁾

オランダにおける弥三郎の私生活についてはわからぬことが多い。多少とも手控えやメモの類をとっていたと想像されるが、現在のところ何も発見されていない。

留学生の一行が咸臨丸に塔乗し、品川沖を出帆したのは文久二年（一八六二）六月十八日（和暦）であり、長崎入港は八月二十三日。

長崎で便船のカリッブソ号を待つことと、出発準備のために一カ月も長居し、ようやく長崎をあとにしたのは九月十一日のことである。バタビアに向う途中、フロリアート島の西南で座礁し、九死に一生を得たり、バタビアやセント・ヘレナ島に寄港したりして、オランダのブラーウェルスハーフェンに入港したのは、品川を発ってから実に三百二十四日目の文久三年（一八六三）四月十六日（洋暦六月六日）のことであった。

さらにここから海軍軍港のヘレフトスライス、ロッテルダムを経てライデンに着いたのは四月十八日のことである。留学生の一行は、ひとまずブレーストラートの「ホテル・ド・ゾン」⁽³⁾ Hotel de Zon に投宿し、市内見物をしたのち、教師を雇ってオランダ語の稽古などを始めた。オランダの生活に少し順れて来たところで、津田と西と職方一同はライデンに残り、内田以下その他の者は四月二十八日（洋暦六月十五日）ハーグに移って行った。

ライデンに居残った者たちの生活地は、当地の古文書館に残っている住民登録によって知ることができる。弥三郎についていえば、かれは船大工の上田虎吉と同居し、

レーベンダール Levenmaal 三百四十六番地（現在の二十七番）に住み、翌一八六四年九月三日（洋曆）にアムステルダムに移るまでライデンに逗留した。

オランダにおける大野の動向と生活を知る史料はきわめて少ないが、赤松大三郎の在蘭日誌・談話筆記・黒皮のポケット日記などから、ある程度のはわかる。

文久三年（一八六三）十一月二十四日（洋曆一月三日）——ドルトレヒト在住の赤松は、前日（二十三日）ライデンに赴きホテル・ド・ゾンで一泊し、この日の午前九時ごろ、津田真一郎の下宿を訪ねるが不在につき、西周助の下宿を訪ねた。

お昼ごろライデン大学の Hoffman 博士と面談したあと、ホテルに戻り昼食をとっている。昼食後、レイデルドルプに行き、レンガ工場を見学してから、当地のカフェに入りユネバー（オランダ焼酎）を飲み、玉突きをやった。

やがて馬車でライデンに戻ると、ファン・パーク宅で夕飯をごちそうになる。食後、西を誘い、夜十一時半まで、三人でカルタ遊びをやる。深夜、赤松は、ホテルに戻るのだが、そこには職方の大野・中島・大川・古川・山下ら五名がかれの帰りを待っていた。

一月といえば厳冬の候だが、赤松と職方一同はストーブや暖炉の火を前にし、ユネバーを飲みながら歓談したことであろう。

赤松の在蘭日誌のこの日の記事に、

既に四時に及ひたる故、車を走らせてレイデン江帰ル、四時半なりし、ファンバーク方ニ而夕飯を用ひ、津田を連れりて夜十一時半迄カールトスベル（カード遊び）を為ス、夫ヨロシメント（ホテル）江歸りて宿、弥三郎、兼吉、喜太郎、庄八、岩吉来ル、明朝第一のトレイン（汽車）を以てハーケ（ハーグ）江至る用意をなす……

（ ）内は筆者による

とある。

文久四年（一八六四）六月十日（洋曆五月七日）——赤松はハーグよりレイデンに赴き、津田、西、ファン・バーク、職方、 Hoffman 教授宅などを訪ねている。

七日、七日期第一のトレインを以てハーケを發しレイデン江至ル、津田、西井ファンバーク及職方之者を訪ふ、午後三時、 Hoffman 方を訪ひ、雅言集覧などの部迄を同氏江進物とす、……

慶応元年（一八六五）四月十二日（洋曆五月六日）——この日、アムステルダム（¹¹）の赤松のホテルを、大川と大野が訪ねている。ドルトレヒトのヒップス造船所で建造中の開陽丸の工程も漸次進捗し、この年の秋には進水式を挙行する運びになっていた。

赤松は、仕事もほぼ終わり、ドルトレヒトに滞在する必要が必ずしもなくなったので、造船学の研修のためアムステルダムに居を移すことを考えていた。赤松の「六十年前の阿蘭陀留学」に、

「其処で私は大体の用事も終ったので、造船学研究の便宜から翌慶応元年五月上旬に、アムステルダムに移った」とある。

赤松がアムステルダムに赴いたのは、移転に先立って下宿を捜すのが目的であつたようである。大川と大野は先発として、すでにライデンよりアムステルダムに移っていた。

赤松の在蘭日誌には、

○四月十一日、西洋五月六日 土曜日 快晴 早朝、喜太郎并弥三郎来り尋ぬ、夫々車ニテ一統、弥三郎宅に至る終日諸方某廻すといへとも適宜家更になし……

とある。

大川喜太郎⁽¹²⁾はこの時期、アルバート・ブラム一家と共にウィッテンブルガーグラフト九番地かズヴァネンブルガー街七番地に住んでいたと考えられる。⁽¹³⁾

弥三郎がライデンの下宿を引き払い、アムステルダムに移つたのは、ライデンの古文書館の記録によれば、一八六四年九月三日（洋暦）のことであり、同年十月二十四日にアムステルダムで移動届け（転入登録）をしている。アムステルダムの古文書館に残る「住民登録簿」Bevolkingregister には次のような記載がある。

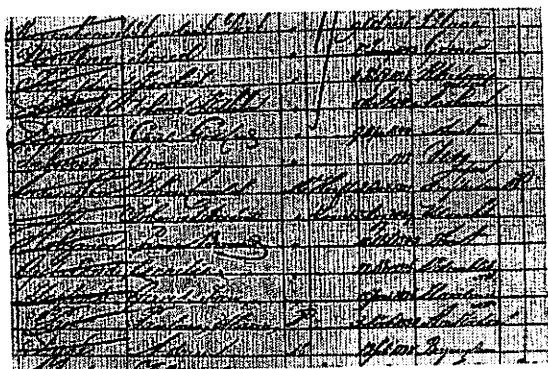
続き番号……………十

登記した日付……………（空白）

姓 名……………Saberoo

名 前……………Ono

性 別……………man



上から6番目に大野の名前・生年月日・生誕地
がみえる（『住民登録簿』より）

世帯主との関係……………（空白）

生年月日……………1818

生まれた所……………Yedo

独身・既婚の状態……………（空白）

宗教……………？

職業……………Instrumentmaker

住所……………Toren Steeg 381

転入登録年月日……………24 octo 64

前の住所……………Leyden

移動年月日……………（空白）

移動先……………（空白）

死亡年月日……………（空白）

原籍……………（空白）

（法律上の住所）

行政区内での……………（空白）

転居……………（空白）

備考……………（筆者註・一行記載あるが判読できない）

幕府オランダ留学生



アムステルダムの大野弥三郎の下宿
(正面のカフェ)

弥三郎は、トールン・ステール Toren Steeg 三百八十一番地（現在の七番地——ダム広場に面した王宮の裏手）に住んでいた。赤松が「夫が車ニテ一統、弥三郎宅江至ル」といつているのは、この番地の家のことである。大野の下宿は健在であり、そこは今はカフェ Koffiebar となっている。（註・写真参照）。

赤松と大川と大野ら三人は、馬車に乗って下宿捜しを試みたが、この日は徒労に終わったようである。

赤松が泊ったホテルについては、いくつか考えられるが確言はできない。

ふたたび大野の住民登録に話をもどす。かれの姓名はオランダ風に綴ったものである。宗教欄には（？）とあったが、これは渡蘭の折に、軍艦奉行・井上信濃守（清直）より、一、いかなる場合にも日本の秘密を洩らざること。

一、キリシタン宗門に肩を入れまじきこと。

一、本朝（わが国）の風俗を改めまじきこと。

と、三ヶ条の誓いを立てさせられており、アムステルダム戸籍吏の前で、

「宗教は？」

とたずねられたとき、

「わからない」

と答えたか、あるいは

「無宗教です」

と答えたかの、どちらかであろう。

オランダ留学生の住民登録簿の宗教欄に関するかぎり、ほとんどが空白になっている。当たりさわりのないように、
一様に

「宗教はありません」

と答えたものであろう。

弥三郎の職業は、器具製造業者イレステルメントマシナールとなっている。

赤松のポケット日記の記述によれば、大三郎がドルトレヒトの下宿を引き払い、アムステルダムに移ったのは慶応元年（一八六五）五月九日（洋暦六月二日）のことである。赤松は、

二日（金）

十一時ハーケ（ハーグ）出立、二時アムステルダム^マ新宅着ス、途中ハルマンスト云へる人と……

とメモしている。

「アムステルダム新宅」とは、ビンネン Binnem 九十三番地（現在のアムステル Amsterdam 百八十番地）の下宿⁽¹⁴⁾のことであろう。

洋暦の六月三日より五日までの間に、大川と大野は毎日のように赤松と会っている。

赤松の短い記述からは、かれらが話題としたものをうかがい知ることができないが、お互い修学のことや暮らしたこと、故国のこと、仲間の消息などを話題とし、しばしば食事をいっしょにとりながら歓談したものと思う。赤松のポケット日記からひいてみよう。

三日（土） 十日

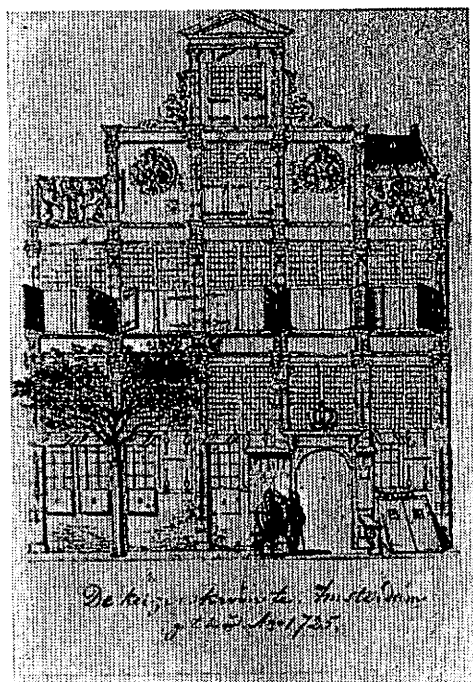
ハルマンズに同道、向河岸フルツクインワートルラント江至り、喜太郎弥三郎来ル、ケイセルスコローン
四日（日） 六月十一日

今日⁽¹⁵⁾カルフルスタラートケイセルスコローンにて中喰所とす、喜太郎弥三郎来リムールマン⁽¹⁵⁾来ル
五日（月）

ケイセルスコローン昼喰、喜太郎弥三郎来ル

（ ）内筆者による。

赤松の記述の中に「ケイセルスコローン」とか「カルフルスタラートケイセルスコローン」といった字句が見られるが、これはアムステルダム繁华街のひとつカルバーストラート Kalverstraat 七十一番地にあった「ケイセルスコローン」De Keizerskroon (王冠の意) というホテルのことである。もともとホテルといっても、レストラン・バー・競売場を兼ねており、建物は十六世紀に造られたが、今世紀初頭にとりこわされ、現在は洋品雑貨店となっている。



ケイセルスコローン (現存せず)
(レンブラントのエッチングより)

当時はなかなか有名なホテルであり、時々、こつと用品の競売も開かれたようである。現在の建物には当時のおもかげはないが、レンブラントのエッチングから、かすかにありし日の姿を想像することができる。

赤松は『半生談』⁽¹⁶⁾の中で、

「尤も晩餐を下宿で執ったのは僅かの間で、後には大概外出して旅館ホステルのダブル・ゾット(公開食堂)ですることにした。毎日四時頃造船所の帰途其所へ立寄り談話室で新聞・雑誌を読んだり、集り来る人々と種々の談話を交はし、やがて時間が来ると食堂に入るのであった。毎夕の食卓で懇意にな

った市民も少なくなく、之等の人々の談話は和蘭社会の状況を認識する上にも非常に有益で、又愉快な日課であつた」と述べているが、かれが毎晩通つた「旅館^{ホテ}」というのは「ケイゼルスクローン」を指しているとも考えられる。そこはアムステル川畔にあるかれの下宿からも近いのである。

慶応二年七月四日（洋暦八月十三日）——この日、赤松は、ポケット日記の中で、さる月曜日の午後時計・精密機器技師のアンドレアス・ホーヴウ（Andreas Holwü 1803—1885）に弥三郎を引き合わせ、製作の指南を依頼し、同時に天文用の精密時計の代金八百五十フルデンを支払つたとしている。

赤松からひくと。

十六日（木）

ハーケ逗留

弥三郎を引連、去ルマインダフ午後時辰儀師ホユー江引合せ、製作方指南之義相頼ミ相談、図スミ、アストロノミセコロック代百料八百五十キユルデン

「去ルマインダフ」とは、洋暦の八月五日——Maandag（月曜日の意）のことである。「ホユー」は「ホーヴウ」のことである。「アストロノミセコロック」とは Astronomische klok（天文用の時計）を指す。

筆者は、先年、大野弥三郎の子孫宅で、直道氏が作成した弥三郎の履歴を見る機会があつたが、そこにはオランダ滞在中に師事した教師名が、次のようにしるされていた。

測量機械師

エムデン氏

時計師 ホウピー氏

天台司職 カイゼル氏

洋学師 ホウフマン氏

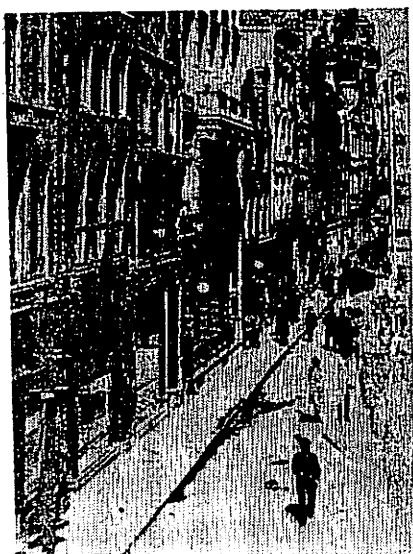
これら四人の名は片カナで表記してあるだけで、欧文は付いてはいなかった。

エムデンについてはどのような人であったのか、従来よくわからなかったが、アムステルダム古文書館の史料と記録によって解明することができた。かれのフルネームは、アブラハム・ファン・エムデン Abraham van Emdenである。

エムデンはアムステルダム生まれのユダヤ人である。

一七九七年四月十三日に生まれ、一八六〇年三月三十一日に亡くなった。妻もユダヤ人であり、名前はサラ・ファン・リヤー Sara van Lier。一八〇〇年十二月二十二日にユトレヒトで生まれている。没年は不詳。

赤松や大野らの日本人留学生らがエムデンの店に出入りしたとき、アブラハム・ファン・エムデンはすでに亡く、未亡人のサラ・ファン・リヤーが店を切り盛りしていた。店は、先に述べたケイゼルスクローンがある、カルバーストラート二十六番地（現在の番地）にあった。



左から3番目の建物がエムデンの店（現存せず）

が、建物は約五十年前にとりこわれ、その跡地（二十六番地と二十二、二十四番地の土地）に「スイス・ホテル」Hotel Suisse が建てられた。それはいわゆるアル・デコール風の建築で、アムステルダム一流ホテルの一つであった。残念ながらこのホテルは火事で焼け、今は「レストラン・スイス」となっている。

アムステルダム市の『総合住所録』(Algemeen Adresboek der Stad Amsterdam 1864—1865) には、エムデンの店の所有者名・商売名・住所および宣伝文などが見い出せる。それを次にひいてみよう。

Emden, (A. van)

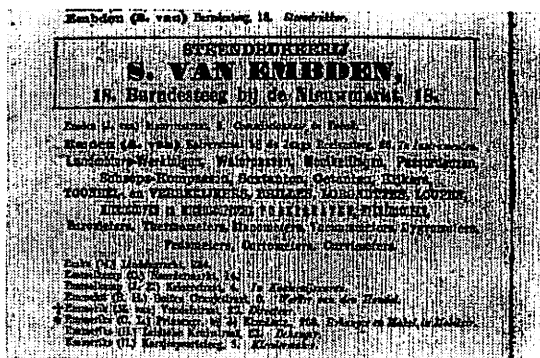
Natuur-, Gezigt- en Zeevaartkundige-Werktuigen en Instrumentmaker.
Kalverstraat bij de Jonge Roelensteeg E 227, Amsterdam.

(アブラハム・ファン・エムデン。自然科学、光学、航海用の器械製作者。アムステルダム市E区二百二十七番地、ヨン・ルーレンステーヒそばのカルバート街)

また一八六五年代の店の「宣伝文」は次のようになってゐる。

Emden (A. van) kalverstraat bij de Jonge Roelensteeg, 26. *In Instrument. Landmeters-Werktuigen, Waterpassen, Meekelingen, Passerdoozen, Scheeps-Kompassen, Sextanten, Oceanen, Kijkers, TOONEEL-en VERREKIJKERS, BRILLEN, LORGNETTEN, LOUPEN,*

MICROSCOPEN en MICROSCOPISCHE PRAEPARATEN, STEREO SCOPEN, Barometers, Thermometers, Manometers, Vacuummeters, Hygrometers, Pedometers, Cartometers, Curvimeters.



エムデンの店の広告文（中央の部分）
（『総合住所録』より）

（アブラハム・ファン・エムデン。ヨンヘ・ルーレンステーヒとそばのカルバート街二十六番地。器械製作。測量器械、水準器、測鎖、コンパス、羅針儀、六分儀、小望遠鏡、視劇用双眼鏡、めがね、鼻めがね、拡大鏡、顕微鏡とその部品、実体鏡、気圧計、体温計、圧力計、真空計、温度計、万歩計、曲線計等々。）

アブラハム・ファン・エムデンの住民登録簿には夫婦に関する記述のほか、

ウィリアム・ジョージ・ファン・エムデン（一八四八年生まれ）

ウィリアム・アーガスト・ファン・エムデン（一八四九年生まれ）

の名前が見られる。この二人は、アブラハム・ファン・エムデンの甥にあたる。かれらは叔父の店を手助っていたとも考えられる。

さらに今述べた甥以外に、

アレキサンダー・マヒエル・ファン・リサ

Alexander Machiel van Lissa

モーリス・ファン・リサ Maurice van Lissa

ら二名の名前も登録されている。

前者のファン・リサは、一八四三年四月十一日にミデルブルフ Middelburg に生まれ、一八六二年にアムステルダムにやって来た。一八六七年（慶応三年）三月二十六日に日本に行ったことになっており、これは幕府がオランダにあつらえた開陽丸が横浜に到着した日でもある。当時、かれ

は二十四歳であった。

後者のファン・リサは、一八三二年十一月二十四日にミデルブルフで生まれ、一八六三年八月十日アムステルダムに来てゐる。職業は軍医と測量師を兼ねていた。

この二人は共にユダヤ人であり、兄弟であつたものと思う。かれらはエムデンの店とはどのような関係にあつたものか判然としない点もあるが、ファン・エムデンの未亡人を助け、二人の甥らと、店を手伝つていたものと考えられる。

『総合住所録』によると、一八六五年当時のエムデンの店の広告は、次のようになってゐるからである。

Lissa (M. van) Kalverstraat bij de Jonge Roelenssteeg, E 227. *Instrumentmaker.*

(モーリス(?) ファン・リサ。ヨンヘ・ルーレンステーヒそばのカルバート街、Eの二百二十七番地。器械製作者。)

ところで水田信利氏の『黎明期の我が海軍と和蘭』(昭和十五年、雄風館書房刊、非売品)に、洋服姿の大野弥三郎とシルクハットをかぶり、かつぶくの良いオランダ青年の写真が入っており、その説明には「傍に立てる和蘭人の姓名不詳」とある。

このオランダ人こそ、ファン・リサ兄弟の一人ではなからうかと思う。ともあれ将来、アムステルダムのユダヤ人会の方面から糸をたぐれば、何か判明するかも知れない。

「時計師ハウビー氏」とは、アンドレアス・ホーヴウ *Andreas Hohwü* のことである。アムステルダムの古文書



弥三郎とオランダ青年
 (『黎明期の我が海軍と和蘭』より)

館に残る住民登録によると、ホーヴは一八〇三年七月十八日にシュレスビヒ Schleswig (当時はデンマーク領、現在は西ドイツ北部。Sleswijk ともいう) で生まれ、一八八五年九月二十八日アムステルダムで亡くなっている。享年八十二歳であった。

ホーヴは初め父より時計製造の基礎的訓練を受け、二十六歳のときアルトナ (現在の西ドイツ、ハンブルクの一地区) に赴き、そこで有名な時計師ケッセルズ Kessels に弟子入りし、大型時計の製法を学んだ。

が、さらに高度の技術をもとめパリに出、時計技術者として著名であったルイ・フランソワ・クレマン・ブreguet (Louis François Clément Breguet 1804-1883) の弟子として六年間修業した。一八三九年——ホーヴはアムステルダムに居を定めると、敢然として航海時計と天文用の精密時計の製作に着手した。その住居はアウデスカンス Oudechans 四十二番地であり、番地は昔も今も変わっていない。

かれの作品は早くから信頼を得、多くの商船から仕事を与えられ、その高い技術はやがて各国にも知れ渡り、賞杯を受けるまでになった。ナポリで開かれた展覧会では、イタリア王より国王勲章を授与され、一八五四年には Felix Meritis 賞を、一八六七年にはオランダ国王より獅子勲章⁽¹⁷⁾を授けられた。そして亡くなる年の一八八三年六月には再び国王より大金メダル⁽¹⁸⁾を授与された。

大野がホーヴウの店に入りました頃、師匠は妻アントニヤ・ローズと三人の娘と二人の召使いの七人暮らしであった。ホーヴウが亡くなったのは一八八三年（明治十六年）九月のことだが、その追悼記事が『アルヘーメン・ハンデルスブラッド』（*Algemeen Handelsblad*）と『ニース・ファン・ドゥ・ダグ』（*Nieuws van de Dag*）両紙に掲載されている。

その記事はいずれもホーヴウの人となりとすぐれた業績をたたえたものである。

『アルヘーメン・ハンデルスブラッド』紙の追悼文は、一八八五年十月三日に載ったものである。冒頭の一節をひいてみよう。

フンドレ・ホーヴウ。

本日、当地において八十二歳で亡くなったA・ホーヴウ氏は、西の墓地に葬られた。

A・ホーヴウ氏は天文器械の製作者として有名である。かれは機械学の部門を完成の域にまで高めたばかりか、ちょうど三年前にはアメリカ政府のために天文用の時計の製作をたのまれた。かれの時計の質は世界中で最もすぐれたものであったからである。⁽¹⁹⁾

また『ニース・ファン・ドゥ・ダグ』紙の記事は、後述するカイゼル教授のことばを関接に引用したものである。り、ホーヴウの技量を高く評価したものである。

カイゼル教授は、ホーヴウの振り時計があつて何と幸福なことであつたらうかと、たびたびいった。ホーヴウの時計は規則正しく動き、ブレゲの最もすぐれた時計よりもまさつていた。⁽²⁰⁾

「天台司職 カイゼル氏」とは、当時ライデン大学教授であつたフレデリック・カイゼル (Frederik Kaiser 1802-1872) のことである。かれは一八〇二年七月十日にアムステルダムで生まれ、一八七二年七月二十八日ライデンで亡くなった。

カイゼルは一八一八年、オランダ王立科学協会の会員に選ばれ、一八二六年五月にはライデンの天文台長に任命された。一八三五年、ハレー彗星の研究によりライデン大学より名誉博士号を授与された。一八四五年、この年カイゼルは正教授に進んだ。一八六〇年に天文台 Observatorium が建設され、翌年にはライデンに居を移し、以後亡くなるまでこの学都で暮らした。弥三郎は主として天文台や海上測器についての知識をカイデルから授けられたのである。

「洋学師 ホウフマン氏」とは、ヨハン・ヨセフ・ホフマン (Johann Joseph Hoffmann 1805-1878) のことである。

ホフマンはライデン大学東洋学部教授であるかたわら、オランダ政府の翻訳の仕事を手伝い、オランダ留学生の世話役兼語学教師でもあつた。かれは弥三郎らライデン在住の日本人留学生にオランダ語を教授し、生活上のこまごまとした注意や助言をあたえた。軍医ボンベ・ファン・メールデルフォールトとともに日本人とは最も深いつき合いがあつたオランダ人の一人である。

赤松のポケット日記には、時折、今のべたエムデンやホーヴウの名前が散見する。ことにエムデンの店に六分儀 Sextant などを注文し、製品を受取り代金を支払つたこととか、ホーヴウの店に付け届けをした記述などが見られるのである。

弥三郎がオランダに滞在したのは三ヶ年であるが、慶応二年（一八六六）十月二十五日（洋曆十二月一日）、艤装の

すべてを終えた開陽丸に乗り、フリシゲンより帰国の途に上った。⁽²¹⁾同艦にはオランダ、イギリス、インド人からなる乗組員百九名のほか、内田・榎本・沢・田口・上田・古川・山下、大野・中島ら九名の日本人が乗り組んでいた。大川は慶応元年に病いのためアムステルダムで病死し、伊東・林・赤松ら三名は、引き続きオランダに残り、専門とする学科を学んだ。

フリシゲンを抜錨した開陽は、南米ブラジルのリオ・デ・ジャネイロや蘭領アンボynaに寄港したのち、慶応三年（一八六七）丁卯三月二十六日（洋暦四月三十日）無事横浜港に帰着した。

翌明治元年（一八六八）戊辰六月五日、弥三郎は太政官に徴され貨幣司として、御手当金三百両で明治新政府に仕えることになった。続いて明治二年三月より造幣寮（造幣局）に技師として出仕することになり、本局の銅細工場（銅器のすべてを製作する）の工作師として、主に「天秤」の製作と指導に当った。また在職中、羅針盤・検温器（三個）をつくり宮内省に納入したり、経緯機（蘭名テオドート）や大時計をも製作した。

やがてかれは懷中時計の国産化を思い立ち、息子の⁽²²⁾則好をスイスに留学させた。則好は同年九月に「ジュネーブ時計学校」に入學し、明治十三年二月に卒業したが、さらにパテック・フィリップの時計工場で時計製造技術を実習した。則好は三年間の留学をおえて明治十三年四月に帰国した。

大野親子は宮内省より二千五百円下賜され、造幣局に近い樋の口に時計工場をつくり同年秋九月より製造を始めたが、事業の方はうまくゆかず、やがて工場は閉鎖された。しかし、大野親子の養成した技術者たちは、明治初期につくられた各時計工場に入り、技師としてわが国の時計産業に多大の貢献をしたのである。

明治十九年（一八八八）、大野は、工作所長となったのを最後に、老年をもって退職し、多年の功により、正六位

勲六等を授けられた。そして同年秋十月六日に逝った。享年六十七歳であった。大野弥三郎は亡くなるまでチョンマゲを結っていたというほか、とくに人柄についてはわからぬことが多い。オランダ仕込みの弥三郎の技術の跡は、大阪の造幣博物館内に展示されている「大時計」⁽²³⁾（明治九年に製作）と「地金用天秤」^{てんびん}に見ることができる。

造幣局の目の前を流れる淀川の対岸は、都島区中ノ町だが、その一角に桜宮神社がある。宮司の深瀬幸尋氏からお聞きしたところによると、幕末のころ、境内に「久宗亭」という茶房があり、志士が大勢出入りしたという。明治十八年の大洪水で神社は水びたしになり、また今度の戦争で神社は丸焼けとなったが、神殿の左わきに大きな顕彰碑（「大野規周君記念之碑」）が残されている。

これは明治十九年十一月に、時の局長・遠藤謹助が建立したものである。
なお、参考までに維新後の弥三郎の履歴⁽²⁴⁾を挙げておく。

大阪府士族 大野規周 文政三年辰正月生

- 一 明治元辰年六月廿日工作方判事拝命
- 一 同 二年三月十日造幣寮機械方拝命
- 一 同 年九月十二日造幣権充拝命
- 一 同 三年廿一日是迄職務被免造幣寮
附属拝命
- 一 五年五月十日造幣寮十等出仕拝命月給百五十円下賜

幕府オランダ留学生

- 一 同 六年四月十八日造幣寮七等出仕拜命
- 一 同 八年十月十五日被任造幣中技監同廿五日拜受二等月給下賜
- 一 同 年十一月十七日被任從六位同廿四日拜受
- 一 同 ^(朱世) 十年一月十八日磨寮
- 一 明治十年一月三十一日被任造幣少技師同二月二日拜受一級月給下賜
- 一 同 十三年一月廿日被任中技師同廿日拜受
- 一 同 十五年六月十三日任大藏三等技師三級月給下賜同十九日受
- 一 同 十六年一月廿四日被叙勲六等
- 一 同 十九年二月五日非職被仰付候事同月九日受
- 一 同 ^(朱世) 年十月六日病死

註

- (1) — 「日本時計産業史覚書」『國際時計通信』(第七卷第九号)
- (2) 『続 幕末和蘭留学関係史料集成』(日蘭学会編・大久保利謙編著・雄松堂・昭和五十九年二月刊)
- (3) 一八六〇年代のライデンの時計屋は次の十七店である。時計師の名前、住所(街路名と番地)内は現在のものを挙げよう。

B. van Beek, Haarlemmerstraat 6. 397 (84)

W. Bosman Wzn. 6. 387 (60)

D. L. Broer, Nieuwsteeg 4. 718 (7)

- H. W. de Bruijn, Rapenburg 4. 854 (88)
 - H. Caspari, Haarlemmerstraat 6. 353 (6)
 - J. F. W. Couvee, Hooigracht 7. 794 (26)
 - J. J. Deggeler, Donkersteeg 6. 73 (13)
 - C. L. Goddijn, Beestenmarkt 5. 47 (38)
 - L. Hesselink, Haarlemmerstraat 6. 277 (151)
 - J. Kums, Beschuitsceg 7. 916 (5)
 - M. P. Paulus, Urechse Veer 3. 15 (18)
 - L. D. Planjer, Garenmarkt 2. 245 (48)
 - H. Poet, Nieuwe Rijn 7. 10 (4)
 - J. F. la Rivière, Botermarkt 4. 39 (2)
 - H. Versteegen, Hogewoerd 3. 359 (110)
 - A. V. d. Waag, Aalmarkt 4. 100 (23)
 - F. Th. v. d. Woerd, Rapenburg 4. 853 (86)
- (4) 弥三郎が研修したのだから、このうちどれか。(ライデンの古文書館に勤務する B・N・レーベルラント氏の教示による)
- (5) 『大日本』——六十年前の阿蘭陀留学(大正七年七月号)
- (6) 現在の Breststraat 二十三番地の建物。今は美術店となっている。
- (7) 縦十五センチ、横八・五センチの黒皮表紙の手帳四冊。これにはオランダの地図・カレンダー・諸表・協会の役員名簿・その他の付録などがいれてある。
- (8) 現在の Hooglandsche Kerkgracht 四十四番地。ホフマン博士(日本人留学生の教師兼世話役)の家の斜め真向い。
- (9) 西周助は住所を二度変えた。最初は現在の Hooggracht 九十四番地。次の住所は Nieuwrijn 九十四番地。

- (9) ホフマン博士については拙稿「ヨハン・ヨセフ・ホフマン——ライデンの日本語学者」(法政大学教養部『紀要』人文科学編・第五十号)にくわしい。
- (10) 『幕末和蘭留学関係史料集成』(日蘭学会編・大久保利謙編著・雄松堂・昭和五十七年二月刊)に収録。
- (11) 前掲『大日本』(大正七年七月号)を参照。
- (12) 大川喜太郎については、『歴史と人物』(昭和五十九年五月号・中央公論社)所載の拙稿「幕府職方留学生オランダに死す」もしくは「幕府オランダ留学生——職方について」(法政大学教養部『紀要』社会科学編・第四十七号)にくわしい。
- (13) 前掲の論文を参照。
- (14) 拙稿「アムステルダム赤松大三郎の下宿」——「日蘭学会通信」(二十一号・四月号・昭和五十八年)を参照。
赤松のドルトレヒトの下宿は、Wyke Munt 959 (現在のCの九百五十九番地の造幣所跡)である。現在は音楽学校として使用されている。
- (15) ムールマンとは、クライン・ムーアマン Kryn Moerman のこと。拙稿「ヨハン・ヨセフ・ホフマン——ライデンの日本語学者」の註にくわしい。
- (16) 『赤松則良半生談』(東洋文庫・平凡社)のこと。
- (17) Ridder van den Ned. Leeuw のこと。
- (18) de groote gouden medaille のこと。
- (19) 原文は次のようなものである。

A. Hohwü

Op de Westerbegraafplaats werd heden ter aarde besteld de heer A. Hohwü, op 82-jarigen leeftijd alhier overleden.

De heer A. Hohwü is vermaard als vervaardiger van astronomische instrumenten. Hij had het in dien tak van werktuigkunde tot een hoogen trap van volmaaktheid gebracht, zoo zelfs, dat hem nog pas een paar jaar geleden

de levering van een astronomische klok voor het Amerikaansche gouvernement werd opgedragen, omdat zijn klokken van dien aard de beste zijn ter wereld.

(20) Prof. Kaiser heeft het menigmaal uitgesproken hoe gelukkig hij zich rekende met de pendule van Hohwü, die in regelmatigen gang zelfs de beste klokken van Bréguet overtrof.

(21) 『開陽丸——海底遺跡の発掘調査報告I』江差町教育委員会編。一九八二年刊行。

(22) 前掲「幕府オランダ留学生——職方について」にくわしい。

(23) 前掲論文にくわしい。

(24) 弥三郎の履歴に関しては、「大野弥三郎履歴」と「当局非現在職員名簿中ノ記事」を参照。これらは『統幕末和蘭留学生関係史料集成』（日蘭学会編・大久保利謙編著・雄松堂・昭和五十九年二月刊）に収録されている。

ちなみに大野弥三郎の子孫宅で聞説した資料にもとづいて作成した系図を左に掲げておく。

大野弥五郎（規貞）
（弘化二年五月没）

弥三郎（規周）
（明治十九年十
月六日没）

規好
（嘉永五年二月十三日生ま
れ 大正五年十一月没）

直周
（明治十一年十一月二日生まれ、
昭和十五年二月四日没。牧師）

直道

（大正五年五月二十日
生まれ、齒科医）

直人

（昭和二十六年九月二十日
生まれ、齒科医）

（追記） 本稿を草する上で、三崎ニキ氏、大野直人氏、元一橋大学教授・山口隆二氏、ライデンの古文書館のB・N・レ

ーベルラント氏、ライデン大学講師ジャック・スホルテン氏、アムステルダム古文書館のH・J・エルンスト氏、日蘭学会

幹事のW・オンドラチエック氏、アムステルダム在住の勝山光郎氏らの教示を得ました。記して感謝を表します。

Samenvatting

door Takashi Miyanaga

In 1862 zond het Tokugawa-shogunaat vijftien Japanners voor studie naar Nederland. Zij vormden, om zo te zeggen, het Japanse Marine Detachment in Nederland. Er waren onder hen ook enigen die Nederlandse hogere technieken bestudeerden.

Zij werden "Shokukata" (werktuigkundigen) genoemd. Eén van hen was de chronometermaker Yasabero Ono (1820—1888). Hij spande zich in om zich de techniek eigen te maken en werkte enige jaren bij Prof. Frederik Kaiser (1802—1872) te Leiden, bij de instrumentmaker Andreas Hohwü (1803—1885) en bij de neven van Abraham van Emden (1797—1860) te Amsterdam. Reeds toen hadden deze naam gemaakt in Europa.

Dit artikel behandelt de relatie tussen meesters en leerling, welk punt tot nu toe onduidelijk is gebleven.

Met dank aan:

Drs. J. Scholten

Drs. W. Ondracek

B. N. Leverland
(archivaris)
H. J. Ernst
(archivaris)